

### 第三節 賀茂高女勤労挺身隊・学徒動員

#### 一、賀茂高等女学校勤労挺身隊

二十五歳未満の無職の未婚女性は挺身隊員として動員されたので、進学者、就職者以外は全員が軍需工場で働くことになっていた。本校の卒業生、及び補習科、研究生は、挺身隊員として派遣された。

一九四四年一月二十五日 賀茂高女同窓会挺身隊三十名出動。広海軍第十一空廠隊に配属、壮行式、祈願祭、西条駅にて本校生見送りする。

一九四四年三月二十日 新規卒業生挺身隊四十九名出動、呉海軍工廠に配属される。本科及び専攻科卒業生の一部で構成された。

年度末授業停止期間（三月二十九日～四月二日）の注意に「挺身隊への面会禁止」とあった。また学校長から隊員の滅私奉公ぶりが伝達され、在校生全員が慰問文を提出したこともあった。この年五月に、海軍工廠製作映画「戦士挺身隊」を講堂で上映し、先輩の活躍に在校生は感涙の涙を流した。

#### 二、賀茂高等女学校学徒動員

一九四四（昭十九）年三月七日 学徒勤労動員通年実施が決定される。各学年の状況は、次の如くである。

(1) 四年生広十一空廠（通年動員、一九四四年六月より四五年八月まで） 壮行式、祈願祭、昼食は作法室で職員と会食。午後は送別会、踊りと劇を通学班別に五十余种目上演。来会者は西条動員署長亀井氏、西条警察日高署長、営林署長、同窓会土肥理事、保護者五十有余名。（五・二十九（木）付、学校日誌より）

隊編成 二学期百二十名が三中隊編成となり引率教諭は松野宝三、阿部

富美子二名

作業 発動機部第二工場で飛行機部品の研磨、八月五日より二交替、

九月十日より三交替制で勤務

宿舎 呉市広町東横路木造二階建（昭和十九年八月まで）三交替制になり、広町弥生木造平家建に移動。大部屋に棚つき二段ベッドが並べられ、部屋中央に大机と椅子があった。暖房はなく、寝具は持参した。

食事 主食は大豆七、米三の代用食、副食には魚がついたが四十五年

三月の空襲から出なくなった。

服装 国防色（黄緑色）の上衣とズボン一着貸与されたが着替えとし

て制服上衣とモンペを着用した。頭に日の丸の鉢巻き。寄宿から工場

へ、隊列を組んで軍歌を唱いながら行進する。「学徒動員の歌」「勝利

の日まで」「轟沈」「ラバウル航空隊」「今ぞ決戦」「銀翼の乙女」「椰

子の実」「明日はお起ちか」。賃金は貯金通帳に振り込まれた。

帰省 月一回くらい満員の木炭バスで帰宅した。夜中の二時頃から歩

いて帰ったこともある。

空襲 一九四五年三月十九日の呉空襲では一中隊の宿舍が全焼、生徒

は大広のトンネル内工場で作業中であり、持物一切が焼けたが死傷者

はなかった。

卒業式 四十五年三月二十八日 広町弥生宿舍で行う。吉田一豊校長より

卒業証書授与、引率教諭より祝辞、途中から空襲警報が発令された。

女子挺身隊 卒業後は挺身隊員となり身分が変わったが、作業も生活も変

りなく生徒は全く知らなかった。卒業後、他へ就職した生徒は三月末

で帰郷している。

敗戦・帰郷 一九四五年八月十八日

(2) 三年生、陸軍被服廠賀茂学校工場へ通年動員

一九四四年十一月 本館二階三教室が軍衣の縫製工場となる。三年生

が一九四五年一月まで従事した。その後広海軍工廠に転属となる。そ

の後二年生が引き継ぐ。新三年生となって昭和二十年八月十五日まで

縫製工員として働く。

学校工場の設備（一教室当り）

家庭用ミシン二十台、動力ミシン三台を教室の窓側に二列に並べ中央

に裁縫机三個と椅子。廊下の窓側に裁縫机三個がアイロン台としてあ

る。家庭用ミシンは広島市内の民家から借用したものらしく、それぞ

れに持主の住所氏名の木札がつけられていた。動力ミシンだけが被服

廠の備品であったものと思われる。

縫製軍衣は五種

防暑襦袢（夏用シャツ）と袴下（ズボン） 濃緑色薄地木綿

防寒襦袢と袴下 黄緑色厚地木綿裏毛

雨外套のボタン穴かがりとボタンつけ

### 作業手順は流れ作業

広島市の被服廠から軍用トラックが各種の軍衣を講堂に運び入れ倉庫として使用した。軍衣材料生地は五十枚一単位として裁断されたものが二階一教室に積みこまれた。東組、中組、西組がそれぞれ一から三工場となり、縫製成績を競争した。

(1) アイロンをかけ十枚単位で出す。

(2) 襦袢は十工程で出来上り

袖づくり（袖口のあき、カフスつけ）

身頃づくり（裾の三つ折り縫い、肩当つけ、前立づくり）

衿つけ、袖つけ、袖底と脇縫い

ボタン穴かがり、ボタンつけ。

(3) 検査係の点検

縫製強度をたしかめる。ミシンの目飛びはないか。あき止まりは返し縫いしてあるか。ボタン穴かがり、ボタンつけがしっかり出来ているか。欠陥品はそれぞれの工場に返す。

### 作業状況

被服廠の女子工員が制服に身を固めて指導し、被服科の瀬良先生も指導された。一工場五十人の生徒が自分の持場で朝八時から夕方五時（夏は六時）まで作業した。最も疲れが出てだらけてくる三時から四時まで特攻時間と称して「無言作業」がある。庶務係の生徒が拍子木を打って「特攻！」「特攻！」と合図して回る。各工場の作業状況を、監督の友安先生（物理）が見廻りされる。「特攻終り」の拍子木でホッと一息つく。

### 生徒の生活状況

朝は早く、夕方は遅くまでの作業のため遠距離通学生は寄宿舎に収容。寄宿舎の食事は乏しく暖房もなかった。セーラー服にモンペをつけ、陸軍の星のマークの入った白鉢巻をしめて登校し、鉢巻は一日中しめていた。一九四五年一月上旬三年生は、ようやく慣れた縫製作業を三カ月で二年生に譲り、広海軍工廠に転属となった。昭和二十一年一月上旬、学校工場は二年生に引き継がれ、四年生と同様に広町の

海軍工廠補機部に動員。リュックに身の廻り品をつめて出かけた。

作業 機械類の精密部品を旋盤を用いて作る。三交替制で二直になる  
と午前四時から夜中十二時まで働く。

宿舎 呉市広町東谷 勤労働員学徒女子宿舎（木造二階）

帰省 真夜中の十二時から帰寮して夜食をとり、汽車の切符はなかなか買えないので黒瀬経由で三十軒の道のりを歩いて西条まで帰省した。早朝黒瀬に帰りつくと友人の家で朝食をとらせて貰い仮眠して元気をとり戻し、又歩き続けて西条に辿りつく。一泊して帰寮するときには、きな粉、はったい粉、あられもち等、保存食をリュックにつめて持ち帰り栄養補給を心掛けた。

田植休暇三日間

食糧増産は急務であり動員生徒にも休暇が与えられて帰省した。平素の過労のあまり帰宅しても田植ができないで寝ることもあった。作業部所によっては一日たりとも休暇の許可が出ない所もあった

引率教諭

一月～四月 河野渡教諭 瀬良美栄教諭

五月～七月 岡原スマ子教諭 藤田愛子教諭

七月～八月 小川裕子教諭 北島アツエ教諭

三交替で工場に出て行く生徒を二名の教員が交替で見送った。食糧不足から栄養失調が続出する。大豆かすや、こうりゃん入りの主食でほとんど消化不良症であった。少しでも補給をと、工場への往復途中に、せり、みぞそばを摘ませ、刻んで汁の中へふりこんだ。空襲警報になると防空壕へ避難させるのも責任であるが、疲労のため寝込んで起きない生徒、避難を拒否する生徒には困った。「私たちはこれからどうなるんでしょう」と言う生徒に『明日のことは考えても仕方がない、今の与えられた仕事を一生けんめいやりましょう。』「空襲のないところはどこでしょう」という生徒に、『アメリカまで行けばないでしょう』と答える。盲腸の手術には親がわりに立合い空襲解除の度に人員点呼して安全確認する。有難いことに全員事なく八月十七日の動員解除を迎えた。引率の先生方の話である。